
こんな感じで 星野商店～時給780円～

猫間 三礼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

こんな感じで 星野商店 時給780円

【Nコード】

N4180Z

【作者名】

猫間 三礼

【あらすじ】

数ヶ月前にリストラされ

引きこもりながら好き勝手にやっていた【小塚 コツカヨシト 義人】18歳。

おかげで貯金を使い果たし、いよいよ生活できなくなった彼は再就職をする事に。

しかしこの不況で再就職は困難を極めた…

そんな時見つけた小さなバイト募集記事。

最後の望みを託して電話をしてみるが…

第1話（前書き）

処女作です。

というか…俺なんかが何故書こうとしたのかもわかりませんw
作者は本当に素人中の素人です。

このお話は【小塚義人】君が個性的すぎる仲間に囲まれながら、いろいろ頑張ってみるお話ですよね？（笑
作者的にはそうしたいです（・・・）

まずは、小塚君に就職してもらわないと…

第1話

第1話「スタートダッシュは転ぶと取り返しがつかないから、慎重に走りだそう」

お金持ちって訳じゃないが貧乏でもない。

中学卒業と同時に就職して3年、製造関係の工場に勤めながら20数万の給料をもらいつつ、それなりに楽しく生活していた。

そして、そんな日々が続くと思っていました。
2ヶ月前までは…

「…………金が、ねえ」

6畳1間トイレ、キッチン、風呂付きの、何処にでもあるアパートの1室で携帯電話を操作しながら【小塚 コツカヨシト 義人】は呟いた。

「んがぁー金がねえー、今月の家賃と光熱費を払ったのはいいけど、総資産1万4000円で…」

計算に使っていた携帯を布団に放り投げる。

「このままじゃ来月の家賃は滞納か？いや収入が無い今、この先破綻するのは目に見えてる…だぁぁ！これも不況のせいだ！！不況の大波を回避出来なかった会社がいけないんだぁー」

そう、小塚義人は現在無職である。

3ヶ月前、普段どおりに出社した俺は、朝礼で工場長の話を聞いていた。

しかし工場長の話の内容は普段どおりとはかけはなれた非常に世知辛い内容だった。

「えー、皆さんに大切な話があります。申し訳ないのですが…来月月末をもって当工場を…閉鎖とします。」

いきなり発表された「オマエ来月からニート!!」宣言により困惑する社員、パート一同。

しかし工場長は尚も話を続ける。

「閉鎖と言っても、倒産ではありません。同じ県内にある当社の工場と合併する事になります、しかし、現在の勤務地よりかなり離れてしまう為、通勤できないパートの方は辞職してもらうしか…それと社員に関しては多少の人員削減を行います、後日面談等がありますので承しておいてください」

そして、工場長の言った面談等が終わり、晴れて俺はニートとなりました

まさか【多少の人員削減】に俺が含まれるとは…

しかし久しぶりに自由となった俺は仕事辞めた後、多少あった貯金を使い。

やりたかったゲーム

読みたかったマンガ

見たかったアニメ

見つめたかったフィギュア

をとことん買い、堪能し、非常に有意義な時間を過ごしていた。

結果、今の仕事無し、金も無し、未来無し、の豪華絶望三昧を送る羽目になってしまったのだ。

うむ…これぞ自業自得だな！

「にしても…いつまでも愚痴つてても仕方ない、職を探すか。」

いくら不況といっても全く仕事が無い訳ではない。

職種を選らばなければ、それなりに就職はあるもんだ。

「となれば、とりあえずゲットワ―君（無料就職雑誌）でも貰いに行くか、朝飯もまだだしついでに買ってこよう。」

着ていた黒のスウェットを脱ぎ、部屋に脱ぎ捨ててあったジーンズとシンプルな黒のロンTを着る。

ものの5分で支度を終え、近くのコンビニへ向かった。

そして…帰宅。

家を出てわずか15分程で帰宅、実に無駄の無い行動だ。

決して、2ヶ月間引きこもってたから他人の目が怖くなったとか。外に出るとなんかソワソワするとか…そんなんじゃないんだかねっ
／／／

「…うん…さつさと就職しないと俺、手遅れになるな…おっ！？朝アニメ「キラリ魔法戦士 轟 蔵十郎」の時間が過ぎてるじゃないか…！」

ポチッと近くにあつたりリモコンを操作しテレビをつける。

『世界平和？それがどうした…ワシが目指すのは、この世全ての平和だ。例え世界が平和になろうとも、お主が笑えない世界なんぞいらぬわあ…！だからワシはお主も救うぞ！？のお魔王…ワシはお主の笑顔が見てみたい…いざ！最後の喧嘩をしようではないかああ…！轟蔵十郎推して参る…！』

持っていた魔法ステッキを投げ捨て、鍛え抜かれた筋肉と胸に抱いた信念を武器に殴りかかる轟蔵十郎！

と、そこで【次回予告…！】が始まった。

「ああああ…最終回前の準神回を半分見逃したあ…最悪だあ…今までかかさず見てたのに…クソッ！どこかで配信してないのか！？公式サイトは…？」

俺は部屋の片隅にあるテーブルの上に置かれたパソコンを開く。

そして開くと同時に勢いよく

「そっじゃねえだろ俺えええ…！」

ガシャァン…！！

パソコンを真横になぎ払った。

「はあはあ…危ねえ、またあつちの世界（アニメ界）に連れてかれるところだったぜ…轟巖十郎恐るべし…」

ちなみに【キラリ魔法戦士 轟巖十郎】とは、

ラブリーなコスチュームに身を包んだ59歳身長193センチ体重120キロ、角刈りで筋骨隆々の魔法戦士、轟巖十郎が全てを救う為に拳ひとつで敵と戦い更正させていくアニメ番組である。

ぜひご家族揃ってお楽しみください

「とりあえず…まずは職探した！自分で思ってた以上に俺は壊れていた…一刻も早く社会復帰しなければ！！」

そうとわかれば、やる事は1つ！

マシンガン・ワーク・テレフォンだ！

つまり…良さそうな職場に片っ端から電話をするだけ。

ゲットワ―君をめくりながら条件の良い職場を探す事、数ページ。

「まずは…コイツ！君に決めた！」

【CD製造工場、簡単な仕事です、週休2日、月給25万以上、残業手当あり】

「素晴らしい！前と同じ工場勤務だ、作業は違うが雰囲気的に慣れるのも早そうだな」

プルルル…プルルル…プルッ

「もしもし！ゲットワー君を見てお電話させていただいたんですが、え？はい、ああ…はい、はいわかりました。失礼致します。」

…プツッ

「既に採用が決まっているだ！？バカな！ゲットワー君の発売日は一昨日、それからまだ2日しかたっていないんだぞ？恐るべし就職難民…」

好条件の職は言わば【肉】

そして、就職難民は【ピラニア】

大量のピラニアが入った水槽に肉を入れたらどうなるか…

我先にと食いついて、肉と言う名の職は一瞬で消えてしまう

「ゲットワー君が発売されて2日…時既に遅しか？いや諦めるのはまだ早い！俺のマシガン性能をナメるなよ！！」

プルルル…プルルル…

「もしもし！ゲットワー君を見てお電話させて…あっ…はい…はい…失礼します」

プルルル…プルッ

「もしもおし！！ゲットワー君をお……わかりました…はい。」

プルルル…プルルル…プルルル…

「はい残念！！3コールで出なかったから切りまあす！！俺という優秀な人材を逃した事を悔やむがいい！！」

プルルル…プルルル…プルルル…プルルル…プルルル…

「電話でてよ…（泣）」

……2時間後……

「はあはあ…はあ…ま、まさか全滅とは…内定しているのは仕方ないが、中卒つてのがここまで影響するとは…」

実際、仕事はあった

しかし、どの会社も正社員は高卒以上だった、確かに最低人員で効率よく仕事をするには優秀な人材が必要だが…

学歴だけが全てじゃないだろうに。

「これだけ探して無いと、いよいよ切羽つまってきたなあ……ん？」

なかば諦めかけながら、ゲットワ―君をめぐっていると、とあるページの片隅、片隅と言うか…欄外に

【星野商店、バイト募集、TEL後面接】と小さく書かれていた。

「バイトかあ…出来れば正社員が良いんだけど…このまま無収入はやバイよなあ…はあ…仕方ない、職を選んでたら就職なんて出来ないし、どこか正社員で働けるまでの繋ぎって事ならアリか」

実際、何でもいいから働かないと住む場所すらなくなるからな。
早速電話してみよう。

プルルル…プルルル…

「お電話ありがとうございます。星野商店です。」

数回のコールの後、携帯から聞こえたのは、柔らかく澄んだ優しい声
無駄な例えが必要ないくらい、人を安心させる優しい声だった。

「あのっ！ゲットワ―君を見てお電話させていただいたんですが、
バイトの募集はまだ受け付けてますか？」

「ありがとうございます、はい。バイト募集の件ですね、少々お待ちください。」

保留ボタンを押したんだろう、携帯から軽快なリズムの音楽が聞こえてきた。

正直、商店と言うくらいだからお爺さんかお婆さん、もしくは中年の方が電話に出ると思ったが、今の声は間違いなく若い、20代：いや、もっとと下かな？

ガチャ

「お電話かわりました、店長の星野です。」

次に携帯から聞こえたのは予想してたような中年男性の声だった。

「あの、バイトの件でお電話させていただいたんですが…」

「よく見つけたねえ、あんな片隅の落書きみたいな募集を」

店長自分で言っちゃったよ…

「ん、バイトかあ、君いくつ？」

「えと、18歳です。」

「18歳かあ、学生さんかな？」

「いえ、中学を卒業してから3ヶ月前まで工場で働いてました。今は…その、フリーターです」

どうせ後でバレるんだ、今のうちに中卒って言っても問題無いだろう。

「なるほどねえ…」

またダメか？

「んじゃ今から面接これるかな？場所はわかる？」

「え？今から？場所はなんとなくわかりますけど…今ですか？」

「そう今から、場所がわからなくなったらまた電話してくれれば案内するから、んじゃまた後でね」

「あっはいわかりました、それでは失礼します！」

ブツツ…

ふう…俺は携帯を置いて一息……つけねえ!!

「やべえ！今から？俺ずつと風呂入ってねえ！急がないと!!」

予想外の展開に慌てて支度を開始、風呂場がめちゃくちゃになるくらい荒々しくシャワーを浴びたかいがあつてか、20分程で支度は終わった。

星野商店は自宅から15分程にある【初音台商店街】の中にある。大きな商店街ではないが、店の数もそれなりで、地元の主婦や学生には人気のある商店街だ。

「えーっと…星野、星野…あつた!!」

商店街に入つてすぐに星野商店はあつた。

木造住宅で1階が店舗、2階が自宅、なんとなく昭和のかおりがする落ち着いた感じのお店だ。

「すいませ〜ん!!先ほど電話させていただいた者ですけど!!」

そう言えば…名前すら言っていないけどいいのか？

「すいませ〜ん!!」

何度か呼ぶと奥のドアから、ぽつちやりとした優しい感じの中年男性がでてきた。

「おっ？来たねえ？はじめまして、星野商店店長の星野です。」

「はじめまして、小塚義人です。」

「小塚君ね、よし！早速面接をしよう！ついてきて！」

そう言つて星野店長は出てきたドアに戻って行く。

ついていくとドアの先はかなり広い事務所になっていた
まあそのほとんどは在庫商品が置かれていて、事務所兼倉庫のよう
な感じだ。

星野店長に案内されるまま机と椅子があるスペースについていくと

「よいしょと…ふう～小塚君も座つて、それじゃ面接を始めます。」

「

「あつはい、お願いします」

「面接の質問…いや、採用の条件は1つ。何も聞かずに就職できる
か！…」

「はあ！？え？どう言う意味ですか？」

「ん？言葉通りさ、事前に勤務時間、給料その他もろもろ何も聞
かずにそれでも働きたいなら雇つてあげる。」

「な、なんすかそれ！？事前に給料すらわからずに働くとか無理で
すよ！てかそれ法律的にどうなんですか！？」

「ん～嫌ならいいんだよ？ただほら…ウチに電話してきたくらいだ

から、小塚君も大変なんじゃないの？」

「うっ、それはまあ…そうですね…でもさすがにその条件は…」

「んじゃこの話しは無しで…」

「ああああ！ちょっと待ってください！少し考える時間を！」

確かに四の五の言っている場合じゃないのは事実だ。始めてもないのに不安になっても仕方ない！！

なら…行け！恐れるな！このままでは待つのは破綻だけだ！進め！走れ！ゴー！ゴー！ゴオオオウ！！！！

「んうううがああ！！わかりました！！やります！！やらしてください！！雇ってください！！」

よく言った俺ええ！！

「ニヤツ…本当にいいんだね？小塚君？今なら戻れるけど？」

「構いません！俺は引きこもり生活を終わらせ、新たなスタートをきるんです！！」

「よし！小塚君採用！合格！おめでとう！！それでは勤務条件を発表しよう！！」

- 1、週6日以上勤務
- 2、休みは不定期
- 3、1年に1回契約更改（クビもあるよ）
- 4、時給780円からスタート

「地味にシビアでハード！？でも稼げそうだし…わかりました！！
それで構いません、これからよろしくお願いします！」

「こちらこそよろしく、小塚君！」

こうして、俺は星野商店に勤務する事になったが

この時、何故もう少し冷静かつ慎重な判断ができなかったのか…と後悔するのはもう少し先の話。

第1話（後書き）

最後まで読んでくれてありがとうございます！！

「個性的すぎる仲間」

登場しませんでしたねw

とりあえず、小塚君は就職出来たようです。

今回は、個性的すぎる仲間を出していきます。

多分、きっと…

出てこい（、。。、）！！

第2話（前書き）

今回は引きこもり小説になってしまいました…何故に？

第2話

「レベッカ！プルシェンコー！！」

「違う！！もっとお腹から声だしてみよう！！」

「レベッカ！プルシェンコオ！！」

「いいよ！！そのまま憂いと悲しみを込めて言ってみよう！！」

「レヴェツカア〜プリュシェンクオオン！」

「いいよ、いいよお〜！？小塚君いいよお〜」

…俺…何してんだ…

第2話

【魔法のあいさつレベッカ！プルシェンコー！？】

「んじゃ、勤務条件も伝えたし…何か質問とかあるかな？」

無事に採用された俺に星野店長が尋ねてくる。

週6日以上勤務
休みは不定期

年に1回契約更改（クビもあるよ）
時給780円

以上4つがここ【星野商店】で働く為の条件だ。

「んー地味にハードでシビアですけど…しっかりと収入を得られそうなんで問題ないです。むしろ、そんなに働かせてもらえてありがたいですよ」

「そうかーそれなら良かったよ、こちらとしても若い男の子が欲しかったところでねえー商店っていつでも棚卸しや商品の補充は意外に力仕事なんだよー」

「力仕事なら任せてください。体力には自信あるんで！今は（引きこもり生活で）…多少衰えてますが…すぐに元通りになりますから！」

「あはは！うん、頼もしいね！期待してるよ小塚君！？」

「はいっ！」

うん！いろいろと驚いた事もあったけど、勤務条件もそれなりだし、店長は優しいそうだし…頑張れそうだな！！

…ん？そつえば…

「星野店長、少し聞きたいんですが…さっきからお店に誰もいませんよね？大丈夫なんですか？」

「え、ああゝ大丈夫大丈夫！お昼前までは、あまりお客さんこないからゝそれにお店のドア開けると呼び鈴が鳴るようになってるからねえゝ」

そうだったんだ…確かに、星野商店がある初音台商店街は主に、主婦や学生さんが利用するからな。

平日の午前中は暇でもおかしくないか。

「それにお昼のピーク時までには、ゆずちゃんも帰ってくるし」

「ん？ゆずちゃん？」

「ああゝゆずちゃんて言うのは僕の娘。今は用事で出掛けてるからいないけど…確か小塚君からの電話に出たはずだけど？」

「あつ！？あの声が綺麗な女の人って娘さんだったんですか！？いや…正直、商店ってイメージとはかけはなれた声だったんで、少し焦りましたよ」

「あはは、ゆずちゃんは声もいいけど外見も美人なんだぞゝそれに家事、炊事、洗濯、全部得意でいつお嫁に出しても恥ずかしくない自慢の娘だよ」

おおゝあの綺麗な声から想像するに、かなりの美人さんだとは思っていたが…

そこまで完璧だと会うのが非常に楽しみだ！！

一緒に仕事してれば仲良くもなれるかもだしこれはアレか？いわゆる恋愛フラグですかあ？そんなあゝいきなりボーナス支給だなんてえゝ

よっ！！店長日本ー！！

なんかもお、抑えられない感情がはち切れんばかりに膨れ上がる予感だぜ！！

「あつ…言っておくけど…いつ、お嫁さんに出しても恥ずかしくないけど…」

店長がそう言った瞬間…世界が…凍った…
いや…これは比喩だ

しかし、目の前の人物は先ほどまでの優しい店長とは思えない程の冷たく重い威圧感を放っている…

「嫁に出すつもりはない…手でしたら…消す…いいな？」

ヒィィィ！！まさかの死亡フラグウー！？

「ハ、ハイッ！！もちろんです！！私、小塚義人は仕事以外には目もくれず馬車馬の如く働かせていただく事をここに宣言致します！！」

ヤベエ！！何この人！！

なんか纏ってるよ絶対！！

暗黒闘氣的な、なんかほらあの皆わかるかなあ！！アレだよほら！！
！怖えええよおおお！！

例えば浮かばねくらい怖ええってええ（泣）

「あつはつは！！冗談だよ冗談 小塚君は面白いなあ～！ゆずちゃん
は16歳、小塚君とは年も近いし 仲良くしてあげてください」
フツと先ほどまでの冷たい空気が和らいだ。

いや…絶対冗談じゃなかったぞ…うん…

ゆずちゃんには悪いが、工作上最低限の付き合い以外はしないようにしよう…

ごめん、ゆずちゃん、俺は命が何より大切なヘタレ男なんだ…

俺はパラレルワールドでは嫁になっているかもしれないまだ見ぬ、ゆずちゃんに謝った。

「さあ！冗談はそろそろ終わりにしよう。どうだろう、小塚君。時間があるんなら挨拶の練習とか簡単なレジ作業の練習してみないかい？」

「え？今からですか？まあ時間はありますけど、むしろ暇ですけど…」

「もちろん、給料はだすよ？これも立派な仕事だしね！それに練習中にゆずちゃんも帰ってくるだろうし、顔合わせは早い方がなかといいだろう？」

給料だしてくれるのか！？

だったら少しでも稼ぎたい俺としてはありがたい。

それに接客業に関しては素人どころか初体験だし、本番前に練習できるならしておかないと不安だ。

てか…

ゆずちゃん見てみたい！！

恋愛する勇氣はないがな…見るだけならタダだ！！

「あつ、はい。星野店長が良いなら練習させていただけるとありがたいです。その、接客業は初めてなんで基本的な事すらわからないんですよ…」

「よし、そうと決まれば……よいしょつと、確かここに……ん……おっ？あつたあつた！ハイ小塚君これ着けて！」

立ち上がった店長は近くにあった段ボールから一着のエプロンを取りだし俺に手渡してきた。

……え？

「あの…星野店長…これって…」

「うん！星野商店の制服だよ？どうだい、カッコいいだろう！？娘がデザインしてくれたんだ カッコいいよね？ねっ？」

「えつと…その、なんと言っか…」

いや…無い…正直コレは無い…
手渡されたエプロンは

ベースは濃いピンクで、所々に緑、黄、青の星がプリントされていて、エプロンの中央には縦に大きく金色で【星野商店ドット混む】の文字が書いてある。

これは…流石に…

「いやあゝ何と言つか…正直カッコわる」

ブウォン！！ オーラを纏った音

「…カッコいい…よな！？ああん？まさか、カッコ悪いとでも言いたいのか！？」

ヒイイイ！！またでたあゝ

めっちゃ怖い！！なまら怖い！！

ああああ…ダメだ…無理…もお心の中でも騒げないもん…怖いもん…過保護だもん…時代が世紀末なら覇者になれるもん…死後は英霊となつて何処かにいるであろう魔術師さんに召喚されそうだもん…ああ…イ ヤたん可愛いなあ…

つとー！？逃避してる場合じゃない！！

「カッコいいでええす！！もおめっちゃカッコいいです！！この斬新な色使い！！時代を先取りし過ぎて一周してむしろ遅れてしまったようなデザイン！！そして何より中央に書かれた言葉が深い！！深いイでええす！！」

「……でしょ？カッコいいよねえゝ ゆずちゃんはデザイナーの才能もあるんだよゝ本当にもお最高の娘を持って僕は幸せだよゝ」

「アハハハハ…ハハツ…」

どうやら機嫌は治ったみたいだな。

にしても…ゆずちゃん…

完璧だと思っただけど、美的センスは壊滅的な…

「さあ！遠慮せず着てごらん、着終わったら練習を始めよう！-」

うわぁ…店長めっちゃ盛り上がってるよ…

はぁ仕方ない、これも仕事だ、それに制服なら従業員は全員着てるはずだし。

赤信号皆で渡ればなんとやらだ。

「えっと、どうですかね？エプロンなんて滅多に着けないんで…これであってます？」

「GJ！！完璧！！パーフェクト！！いやぁ…小塚君！似合ってるよ…実に似合ってる！！-」

いや…なんも嬉しくねえ。

「それじゃ！早速練習を始めようか！？まずは、挨拶の練習から。挨拶は接客業の基本、ちゃんと挨拶が出来ないとスタートラインにすら立てないからしっかり練習するように。」

「ハイッ！！-」

ふう、やっと練習スタートか。

よし！元気だしてやりますか！！

「それじゃ、まずは僕に続いて大きな声で挨拶してみよう！あつ、その時にお辞儀をするのを忘れないように！」

「わかりました！お願いします！」

「それじゃ、いくよ？」

『レベッカ！プルシエンコ！！』

「……………」

「おや？どうしたんだい？緊張なくていいよ。店には僕しかいないだし、大きな声で恥ずかしがらずに言ってみよう！？せーの」

『レベッカ！プルシエンコ！！』

「……………」

「どうして言わないの小塚君。恥ずかしいかい？でもね大きな挨拶は基本だよ？これが出来ないとこのまま雇用し続けるのは厳しくなってくるよ？」

「……………いやいや！星野店長！さっきから当たり前言ってますけど！なんすかその、レベッカ！プルシエンコ！！ってやつは！！普通、接客業の挨拶と言えば、いらっしやいませ！からでしょう！？違いますか？いいや違います！いらっしやいませが基本です！」

「甘い！小塚君甘いよ。確かに、接客業と言えば、いらっしやいませが基本です。しかし、この不況の中他店との生存競争を勝ち抜くには基本だけではダメなのです！！基本をベースに独自に進化させ、それを新たな基本する、そうやって他店との差別化をはかり！！この厳しい不況を乗り切る！！その為に、愛しの娘が考え出したのが【進化系挨拶】レベッカ！プルシエンコ！！なんです！！」

「また娘か！！ゆずちゃんどうした！！【進化系挨拶】って完全におかしいでしょう！！てかレベッカ！プルシエンコ！！は、いらっしやいませの進化系なんすか！？どんな突然変異でそうなったんですか！？俺は、いらっしやいませから、レベッカ！プルシエンコ！！に至るまでの進化の過程が知りたいです！！何故そうなったんすか！！」

「ギラツ… ああん！？ウチの娘が考えた商売戦略になんか文句でもあるんですかねえ？無いよねえ？もし…文句が有る、だなんて言うような口があつたら…そんな口、必要ねえから縫い付けてやるのが親切心だと思わねえかあ？」

……………（泣）

もおやだあこの人おお！！

どんどんヒートアップしてるもおん！！無制限で威圧感が増してるもおん！！

SF枠とか、バトル枠で登場するべきだもん、コメディに向いてないもおん！！

てか…うわっ見てる…めっちゃ見てるうう…！！

俺はこの人のキャラが全然見えてこないってのに！！

「コ・ツ・カ・くくん…返事が無いって事は…文句があるって事でいいのかなあ？いいのかい？いいって事で…いいね！？」

「良くないでえええすう！！文句とかそんな！無いでえす（泣）あるわけがないんでえす！！ただ、ほら僕みたいな凡人には【才色兼備】【良妻賢母】【正義超人】【超電磁砲】【馬耳東風】（パニツク）な素敵お嬢様のお考えを理解するのに時間がかかった次第で

「！！理解が出来た今は【進化系挨拶】とは常連様にも新規のお客様にも楽しんでいただける素晴らしい戦略！！また来たい！！って思わざるをえない改良の余地がない完璧な戦略だと思いまあすです！！はいいい！！」

「……………」

「うわぁ〜無言だ！！」

「ダメ？もお鎮まらない感じですか！？」

「お願い、許して、神様！！」

「お願いします！！届けこの想ひ！！へブンまでフライアウェイ！！」

「……………まあ、いいでしょう。わかってくれればいいんですよ〜確かに、ゆずちゃんには天才と言って過言ではないですからね〜理解するのに時間がかかるのは当然ですよ〜ハハハ」

「（届いたぁ〜神様ありがとうございます！！）アツハハハハハハハ（泣）」

「はい、それじゃ理解したところで…いきますか？」

「もちろんです！レベッカ！プルシェンコ！！と叫びたい！！と俺の魂が熱く燃え多義っております！！はい！！」

「よく言った！小塚君！それじゃついて来てください！いきますよ〜！？」

『レベッカ！プルシェンコ！！』

「ええい！！考えるな！！感じる！！テンションに流されるのも悪くない！！」

「レベッカ！プルシエンコ！！」

「違う！！もつと熱く！！」

「レヴェツカアア～：プルシエンクオオオオ！！」

「いいよ！！凄くいいよ！！もつと！！もつと頂戴！！」

「レヴェツカア～ン！プリユツシエルツオオ！！」

「はい！！オツケー！！いただきましたああ！！はい、じゃこのまま次いつてみよあ～！！申し訳ございませんの【進化系挨拶】！！」

『ちよつとお～ご飯作ってる最中だつてばあ～ダ～メ デザートは最後のお楽しみつ だぞあ～？』

『へへッ、ごめんごめん』

「はい！！小塚君！言つて！！」

「ちよつとお～ご飯作ってる最中だつとばあ～ダ～メ デザートは最後のお楽しみつ だぞあ～？へへッ、ごめんごめん」

「はい！！お父さんのにも、これはどうかと思うから一発オツケー！！それより娘がどこでこんな言葉を覚えたか不安で夜も眠れませ～ん！！」

「理不尽だ！！自分で否定するぶんには怒らないすか！！星野店長！！さつき俺が感じた恐怖はなんだつたんすか！！」

「はい！！次ラストいきま～す！！」

「店長このやる！！聞こえてるだろ！！」

「ラスト！！ありがとうございました！またお越し下さいませ！
！の【進化系挨拶】いくよ」

『バカ野郎！！立ち止まるな！！何の為にここまで来たんだ！！振り向くな！！行けえええ！！！！……ハアハア……やつつ行つたか……ガハッ！！……ツ……どうやら、ここまでらしいな……敵を裏切り……仲間を裏切り生き抜いてきた……そんな俺が誰かの為に死ねるとはな……クク……クハハハハハハ！！いいぜ！！最高だ！！てめえら！！俺の最後の死に戦だ！！とことん付き合ってもらうぜえ！！（こんな俺を仲間と呼んでくれてありがとう……守れよ……世界も……アイツも……）

」

「ハイッ！！小塚君！ラストだよ！！びしつと決めよう！！」

「バカ野郎！！立ち止まるな！！何の為にここまで来たんだ！！振り向くな！！行けえええ！！！！……ハアハア……やつつ行つたか……ガハッ！！……ツ……どうやら俺はここ……長ええわボケエエ！！！！」

ハアハア……ハアハア……

「はあ……い！終了……！！いやぁ小塚君！君、見所あるよ……最後は疲れちゃったみたいだけど他は完璧！！これならすぐにでもお店でれるよ……！！」

「ハアハア…ほ、本当ですか？ありがとうございます。」

つ…疲れたあ

こんなに大声で叫んだのは何年ぶりだ？

工場に勤めてからは叫ぶ事は無かったし、叫んでる内容は意味わからんけど…

まあ…なんか…

「スッキリしたかい？」

「え？」

「大声だしてスッキリしたかい？小塚君…君、自分では気づいていなかったと思うけど、凄く思い詰めた顔をしてたんだよ？」

「俺が…思い詰めた顔を？」

「うん、見ていて心配になるくらい…ね。でも今は疲れてはいるけど、いい顔してる。」

「ハハッ…そんなに酷い顔してましたか？でも確かに…いきなり職を失って、自由を楽しんでたと思ってたのに、実は現実から逃げてただけだったのかもしれない。悩む心を見てみぬふりして、心を助けようとしなかった…本当は不安で…不安で仕方なかったのかもしれないね。」

「小塚君？僕はうまく励ましたり、良い言葉をかけたりはできないけど…大丈夫！！明るく、楽しく、元気よく！！これからはきつとうまくいくよ！！楽にいきましょうか」

「ハハハ…星野店長は前向きですねえ。そうですね、今さら考えても仕方ないですし、それに仕事も決まったし…うん、大丈夫です！これから頑張っていきますよ…!!」

ピンポーン　ピンポーン

「おや？お客さんのようだね〜どうだい小塚君、このままレジの練習をしてみないかい？それに挨拶練習の成果のみせどころだよ？」

「そうですね！レジも基本ですし、早く覚えたいです…!!」

「よし…！それじゃあ〜初接客いつてみよ〜!!小塚君…！挨拶は？」

「大きな声で…!!」

「オッケー…!!さあいくよ!?!」

そうして俺は

星野商店の一員としての一步を踏み出した。

「レヴェツカアア…！プルシエンクオオオオ…!!」
『いらつしやいませええ』

「……………（小塚）」

「……………（店長）」

「……………（お客）」

「あつ、お客さん驚かせてすみません！この子、今日入ったばかりの新人なもので、申し訳ございません。」

「歯あああくいしばれやああああ！！！！クソ店長があああああ
あ！！！！！」

第2話（後書き）

最後まで読んでくれた貴方

そう！アナタ

もしかして…

DMかしら？

こんな駄作を読みきるなんて…

なかなかハードなDMね

気があいそうだわぁん

第3話（前書き）

おまっとなさんです!!

先日の早朝、コンビニで「夕飯用」のお弁当を買った時に

「こちらのお弁当暖めます!」と店員さんに言われ

「え? ああ…はい。」と夕飯用のお弁当がレンジの中を回転する様を眺め続けた…【猫間三礼】です!

感想&評価&苦情&暴言（えw）をいただけると嬉しいんです!
!なまら嬉しいっす!

だってDMですから!!

あつ、勘違いしないでよねっ!!べ、別にDSだって嫌いじゃないんだからノノノ

では、こんな感じで始まり始まり

第3話

ピンポーン ピンポーン

「（満面の笑みで）ありがとうございましたあ。また、お越しくだ
さいませっ……………スッ（無表情に戻る）」

ピンポーン ピンポーン

「（眩しすぎる満面の笑みで）いらっしやいませえ……………ス
ッ（無表情に戻る）」

「あ、あの〜ゆずちゃん？その最後の「…スッ」って無表情に戻る
のは……いたい」

「……………削減」

「…？え？削減？何を？無表情で何を削減してるの？」

「……………笑顔」

「笑顔っ！？笑顔の削減！？何故にっ！？」

「……………エコブーム」

「エコブーム！？いやいやいや！確かに、この不況でエコとか節約とか流行ってるけど、笑顔は削減しないでいいんじゃないかな！？いや、むしろこんな世の中だから笑顔が必要なんじゃない！？出してこう！？もつと笑顔出してこう！？」

「……………」

「感情電源OFF！？ゆずちゃん！？ゆずちゃん！？せめて電源いれとこう！？その、使ってない時はコンセントを抜いてます。的な顔は見てられない！」

第3話

「看板娘は着脱可能？鉄仮面は今日も笑う」

「はい、こちら80円のお返しになります。ありがとうございましたー！！」

目の前のお客さんに、お釣りの小銭を渡し、大きな声で【普通の】挨拶をする。

「うん！だいぶ慣れてきたみたいだね、小塚君！」

「はい、ありがとうございます！レジって思ったより簡単なんですね。」

「そうだね。焦らずに落ち着いてやれば何も難しい事は無いよ。それより、『進化系挨拶』を…」

「しません！言いません！言いたくありません！！」

「え。あの頃の小塚君、輝いてたのに」

俺は店長の言葉を遮るようにはつきりと全力で宣言した。
誰がするか！

二度とあんな恥ずかしい思いはしたくない、てか…

「星野店長も言っていないじゃないですか、俺に言わせる前に自分で言うてくださいよ【レベッカ！プルシエンコ！！】って」

ちなみに【レベッカ！プルシエンコ！！】とは、他店との生存競争を生き残る為の戦略として店長自慢の娘、ゆずちゃんが考え出した【進化系挨拶】である。

レベッカ！プルシエンコ！！は、いらっしやいませ！！の進化系挨拶で、他にも申し訳ありませんなどの進化系挨拶が存在するが、長くなるので紹介するのはやめておこう。

「えっ？僕は言わないよ？だって恥ずかしいからね。あんな挨拶をお客さんの前で言うなんて。ハハッ、小塚君、それは冗談かい？」

「なるほど、なるほどお…！喧嘩売ってるな？店長このやろう！！」

よしその喧嘩買った！！表でろ！！」

「せっかく、ゆずちゃんが考えてくれたのに誰も使ってくれないから小塚君に使ってもらおうと思ったただけだな。ん？もうすぐお昼じゃないか、混み始める前に休憩行っておいで。あつ店から飲み物持っていいよ。おごってあげる」

「話聞けよ！てかつ…急に優しくしないでくださいよ！この振り上げた拳と怒りはどこに向かえばいいんですか！？」

「あはは、とりあえず飲み物持って休憩所向かえばいいと思うよ？」

「微妙にうまいこと言われた！？」

まあ、休憩もらえるのはありがたいな、進化系挨拶の練習からの流れでレジ練習したから正直疲れたし。

「はあ…それじゃ、休憩はいらせてもらいます」

俺はモヤモヤした気持ちを感じたまま事務所に向かった。

店の奥にある事務所はかなり広く、そのほとんどが在庫商品を置く為の倉庫として利用されていて、テーブルと椅子がある事務所は休憩所としても使われている。

「……つらい！！はああ、疲れたー」

事務所にある椅子に腰掛けペットボトルに入ったお茶を一気に半分ほど飲み干した後、背もたれにだらしなく寄りかかる。

「作業としては大変な事なんてないんだけどなあ、まあ慣れるまでは仕方ないか。」

やはり初めてやる仕事は大変だなあ〜と思いつつ、暫く座りながらぼけ〜っとしていると、不意に奥に積まれた段ボールの間から、キイー…ッボタンー！とドアを開け閉めする音が聞こえてきた。

どうやら、積み上げられた商品で隠れていたが、この部屋には裏口があるらしい。

予期せぬ物音に多少ドキドキしながらも、物音をした方向に目を向けると。

「……………帰宅…配達終わり」

小さな、静かな声と共に1人の少女があらわれた。

肩まで伸びた綺麗な黒髪。白く透き通るような肌。淡く薄ピンクの唇。

つぶらな瞳と合わさり、綺麗と言うよりは可愛らしい印象の彼女は、つまり…

美少女である。

もう一度言おう。

目の前に【美少女】が現れた

すまん、もう一度だけ言わせてくれ。

目の前に【美少女】があらわry

「……………誰？」

いきなり現れた美少女を見てテンションをたぎらせつつあった俺と

目があった美少女が、凄く…凄く不信感溢れる顔と声で訊ねてくる。

「……………不審者」

「え、いや違っ！あのっ、今日からここで働かせてもらうことになった、小塚です」

危うく不審者として確固たる地位を築きそうになったので、慌てて訂正する。

と、その時、店長がやってきた。

「あゝゆずちゃん！おかえり！配達ご苦労さま！どう？サト婆は元気だった？」

どうやら目の前のこの子が噂のゆずちゃんらしい。

ずいぶん小さいが、俺が175cmだから…ゆずちゃんは145cmってとこか？

想像より、だいぶ幼い感じだな。

「……………後20年は固い」

ゆずちゃんは、親指をビシッ！と立て、無表情ながら、どこか満足そうな雰囲気で答える。

「そうかい、なら安心だね！サト婆が腰を痛めたって聞いて心配だったけど！良かった良かった あっ、そうそう！紹介がまだだったね？こちら今日から働いてもらう事になった小塚君だよ！」

店長から紹介され、改めて自己紹介をする。

「えっと、小塚義人18才です！接客業は初めてなので迷惑かけるかもしれませんが、よろしく願います！（ニコッ）」

ゆずちゃんは年下だが、接客業に関しては先輩だ。

迷惑かけたり、教わる事は沢山あるだろう。

俺は出来るだけ爽やかかつ、にこやかに挨拶をした。

「……………ゆず」

のにもかかわらず、ゆずちゃんの反応はめっちゃドライだった…お兄さんちよつと傷ついちゃったぞ

やはり、初対面の時にギラついた欲望まみれの目で凝視したのがいけなかったのだろうか…否っ！あれは仕方ない！目の前の美少女に心をたぎらせないのは逆に失礼だっ！！

むしろ、異性に対しそんな不埒な感情をもたせてしまうほど美少女な、ゆずちゃんがいけないのではないのだろうか？そうです、いけないんです！

ああ…ゆずちゃん…君は罪な女…いや罪な美少女だ…

と、自分の持つ最高かつ全力の爽やか挨拶が、なんの効力も発揮しなかった事に半ば絶望しながら現実から目を背けている俺に、見かねた店長が声をかけてくる。

「あゝゆずちゃんは恥ずかしがり屋さんだからねゝ初対面の人にはこんな感じなんだよゝ。でも、大丈夫！慣れれば、その素敵スマイルを遺憾なく発揮してくれるよゝ、もお本当にゆずちゃんの笑顔は可愛いんだよゝ？想像してごらん？あのつぶらな瞳！笑った時に見える可愛い八重歯 あゝゆずちゃん！可愛い！可愛いよゝ！

！もお今日から世界3大美女を追い抜いて、世界1大美女ゆずちゃんとして君臨できちゃうよぉー！！クレオパトラも今頃、嫉妬の涙でエジプト辺りを潤してるよー！？」

うるせえ！！

てか、短いフオーだな！中盤以降はただの親バカだし、後半にいたっては何が言いたいのか意味わからないし！

ほら、ゆずちゃん見て？完全にドン引き…いや、完全に心閉ざしちゃってるよ！？

「店長？星野店長！？とりあえず、落ち着きましょう？ねっ？はい、深呼吸。大丈夫、怖くない、怖くない…」

「…はあはあ…すゝは…ふうゝいやあごめんごめん！ゆずちゃんの事になると、つい熱くなっちゃって」

「いやまあ、いいですけど…それより」

ずっと放置してたから、怒ってるかもしれないと思いチラリとゆずちゃんを見る。話の輪に入れなくてきつと寂しい思いをしているはずだ。

ゆずちゃん！寂しい思いをさせてごめんね？

さあ、義人お兄さんといっぱいお話ししようじゃないか！？

「……………」

あつ、全然平気だ。

怒ってるどころか、なんの感情すら見えてこないや…

「……………お店…行っている？」

もはや挨拶はすんだ。と言わんばかりに事務所を出ていこうとする、
ゆずちゃん。

そんな冷めた態度の彼女を見て、ふいに気になる事を思い出した。

「あつ、ゆず…ちゃん？あのさ、さっき俺がお店に電話した時に、
電話でたのつてゆずちゃん何だよね？」

記憶に間違いがなければ、店長もそう言ってたし。

「……………（コケン）」

ゆずちゃんは店にでていこうとする足を止め、相変わらずの無表情
で小さく頷いた。

やはり、電話の相手はゆずちゃんであつてらしい。
合つてゐるらしいのだが…

おかしい、明らかにおかしい。

俺が携帯越しに聞いた声は、日だまりのように暖かく澄んだ優しく
も元氣のある声だったはず。

失礼だけど、目の前の無機質で機械的な声を発する彼女とは似ても
似つかない。

「そうなんだ…いや、ほらなんて言うか、女の子つて電話だと声高
くなつたりするよね？だから、その、ちょっと印象と違うなあつて、
もう少し朗らかな人なのかなあつて、でも、実際に会つてみたら機械
的と言うかクールつて言うか…あれ？星野店長？どうしたんですか
？そんな【これ以上、余計な口をきいたら、生きたまま電子レンジ
に詰め込んで加熱してやる】みたいなオーラをだしちゃって…！！い
やいや、責めてる訳じゃないんですよ！？ただ、電話越しに可愛い

なあとか、仲良くしたいなあとか、俺的にドストライクの声だなあとか、あれ俺、何言ってるんだろ？いやもお本当、つまり星野店長の言うとおり、ゆずちゃん可愛いっ！最高！！パーフェクト！！ビューティフォー！！ごめんなさい！！」

ダメだ！なんかいろいろとすいませんでした！

だって、会話の途中から店長がなにやら物騒な雰囲気をもたらしまして！！はい！！

とても怖かったでええす。

「あははw小塚君何を怯えてるんだい　つまり、ゆずちゃんの印象が違ってるって言いたいんだよね？ん？小塚君はまだわかってないな　まあ、見た方が早いかな　ゆずちゃん　ちよっとレジ対応の仕方を見せてくれるかな？」

俺が自らの不用意な発言によって、店長からの殺気を一身に浴び完全に混乱している間も、一切の感情を見せなかった、ゆずちゃんに店長が声をかける。

ゆずちゃんは軽く頷いた後…

「いらっしやいませっ！お会計1200円になります。はい、1500円お預かり致します、少々お待ちくださいませ！はい、お返し300円になります。お確かめ下さいませ。ありがとうございますしました！また、お越しく下さいませ！キラッ　キラッ　！？完璧だ！完璧な接客だ！

動作、言葉遣い…

そして何より笑顔！！

つばらな瞳をと細め、ニコリと笑った口元から覗く可愛い八重

歯、その姿は、先ほどまでの機械的な彼女とは違い、その…とても可愛らしい／＼／

不覚にも、見惚れてしまうほどだ…

「はい！！いただきました！いいよ！ゆずちゃん！今日も可愛いよ！あゝもお！見てた！？小塚君見てたかい？最高だよね？？笑顔が力強いよね？この笑顔があれば、クレーマーが来ても！ツンデレな妹が来てもお！腹ペコ騎士王が来ても！絶対負けないよねえ！！」

「……………スツ（無表情化）」

「いや意味わかんないですよ！特に後半が！確かにめっちゃ可愛いです！それは認めますけど、なんですかこの変わりようは！？見てください！ゆずちゃんまた戻っちゃいましたよ！？？」

「ゆずちゃんはねゝ接客のプロなんだよゝプロフェッショナル 私生活と仕事の区別をしっかりとつけれるなんて普通の16歳には、なかなか出来ないよゝ流石ゆずちゃん！！ゆずちゃん流石ゝ f uゝ f uゝ f uゝ！！ゆずちゃんフウゝ！！」

「ああ！うるせえ！星野店長！ゆずちゃんの事になるとダメダメです！主に親としてダメダメですよ！？」

「……………仕事は…必ず完遂する…（ビシッ！）」

何故か満足げにサムズアップするゆずちゃん。

「いやいや、ゆずちゃん？いいよ？確かにそれでいいんだけど、も

う少しこう何と言うか普段から…… ああ！くそっ！可愛いなこのや
ろう！！何でそんなに満足そうなんだよ！」

ささやすぎる胸をはり、ちょこんと親指を立てる姿はまるで「ゆず
ちゃん！こっち！こっち向いて！ヘイ！ヘーイ！」だから、うるせ
えなこの人！

「いいよー！！そう！ナイスポージング！世界親指コンテストNO.
1は間違いないよー！！はいっ！！今日もいただきましたー！次い
そのまま、片足前に出してー前傾姿勢ー膝の上に両手ー！はい！！
だっちゅーのっ」

「おいこら！娘に何やらせてんだ！しかもポーズ古いわ！そして、
どこから持ってきたその一眼レフ！本格的だなバカ親め！後で一枚
売ってくださいませ！店長様！！……じゃない！てか、そんな事ゆず
ちゃんがするわけないでしょー！」

サッ！ビシッ！キュッ！！

「……………キリッ！！」

「ゆずちゃあん！？何してん！？やるの？やっちゃうの！？てか、
だっちゅーのやり慣れてるな！！こんな完璧かつ無駄のないだっち
ゅーのっ初めて見たわ！！いいよ！！そのまま！こっちにも視線く
ださい！！」

「小塚てめえ！ウチの娘を写メで撮ろうとしやがったな……？」

「ヒイイ！すいません！星野店長！つい出来心で！すいません！ご
めんなさい！許し……」

「そんなチャチなカメラで撮ってんじゃねえよ！これ使え！墓場でヌード撮っちまうくれえブツ飛んだ写真家も使ってるカメラだ！！さあ！収める！！ゆずちゃんの魅力を遺憾なくレンズにおさめやがれ！そして後でくれ！」

「…星野…店長…ありがとうございます！まかせて下さい！中学時代、数々のアイドル写真集を読み漁り【淫書黙読】通称（淫デックス）の異名をとった私、小塚義人が、ゆずちゃんの魅力をワールドワイドにお伝え致します！！」

「頼もしい〜ね〜小塚くうううん！！さあ！ゆずちゃん！もつと！もつといっぱいちょうだい！！」

「……ビシッ！……ニコッ ……んう／／……てへっ」

「素晴らしい！小塚義人！脱ニートをして良かったと心の底から思います！ありがとう！ゆずちゃん！ありがとう！」

カシャッ！カシャッ！カシャッ！カシャッ！

「あ〜も〜 ゆずちゃああああん！何でそんなに可愛いのにキレてる！今日はいつも以上にキレてるよ〜！小塚君がいるからかな〜？同年代の男の子の前だから張りきってるのかなあ〜！？だったらお父さん凄く悲しい！でも、残念だけど過去最大級の魅力のかたまりでお父さん複雑だよ〜！？」

パシャ！パシャ！パシャパシャパシャ！

「……へへっ ……チラッ ……おにいたん／／ちゅ」

すっごい破壊力きたー！

「「ごちそうさまでえええええすう！！！！」」

…バタツッ！

「……………任務完了…報酬3万は確実」

こうして俺と店長は、ゆずちゃんの魅力にKOされた。

2人が立ち直るまでの間、店はゆずちゃんが切り盛りし、後に店長は、時給を上乗せした給料&撮影代。

俺は、その日の給料&撮影代を、ゆずちゃんに支払う事になったんだが…

大丈夫だ…反省も後悔もしていない！安心しろっ！

俺は…俺は…

これから強く生きていけるから！！

第3話（後書き）

先輩お疲れっした！

今日も凄まじい苦行を乗り越え後書きまでやって来た皆様に、僕は感動と感謝の気持ちでいっぱいです！

それと、質問なんですけど…いつになったら事務所からでるんですか？
いつになったら働くんですか？
作者は何を考えてるんですか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4180z/>

こんな感じで 星野商店～時給780円～

2011年12月20日20時55分発行